ペスト時代を生きたシェイクスピア

その作品が現代に問うもの

川上重人　著

本の泉社・1200円

かわかみ・しげと
50年生まれ。日本私大教連の役員を歴任

病と自然　人間の生に迫る視点

シェイクスピアが51年の生涯でペストの襲ほど6度あったという事実。延べ9年にわたる人類と疫病の闘いがあったにもかかわらず、作品の中でペストを軸とする作品を生み出さなかったと指摘する点に「確かに」と思わされた。それではなぜ、生と死を前に揺れ動く人間の価値を追い求めたシェイクスピアが、ペストを描かなかったのか。それがこの著の出発点である。

長く私大教員の組合活動に従事してきた日本シェイクスピア協会の会員である著者は、「ペストの感染には、人間社会が作り上げた境界線などない」とし、「個々人の人生の物語は数字に置き換えられてしまう」ことにまず懸念を抱く。さらに「一人ひとりの生活や思考、感性、性癖などの個人の独自性はすべて奪われてしまう」ことに警鐘を鳴らし、「ジュリアス・シーザー」をはじめ、「マクベス」「リア王」などの5作品から、政治的背景と抵抗精神、登場人物とそのセリフの解釈を細かく分析し直す。特に「ジュリアス・シーザー」でのアントニーの演説と市民の例を用いて、「そこには、権力者のどす黒い企みによって踊らされている姿を見逃してはならないだろう」と指摘するなど、人間的価値を奪いかねない今の世とシェイクスピアの作品が重なる分析を続けていく。

ただし筆者の考えはそれにとどまらない。シェイクスピアの描く作品は人間世界を超越し、自然と人間の呼応にあるとする。人は自然をコントロールしようとするが、自然から発生する病まではコントロールできない。だからこそ、人間はどのように生きていくかという普遍的な考えとも重なり合い、日常をどう生きるべきかを問いかけ続けているとする。

一見すると病と人間の関係を探る著のようであるが、シェイクスピアの有名作品を通し、病と自然、そして人間の生に迫った、今の世に生きるシェイクスピア論である。

評者　瀧口雅仁　芸能史研究家